

2020年の東京五輪が決まり、にわかに浮上した国立競技場の立替計画を巡り議論が沸騰している。そのサイズが巨大過ぎることや、神宮外苑の景観破壊、過剰な付帯施設など多くの疑問があるが、何と云っても建設費が高すぎることだ。東大教授で建築家の大野秀敏氏によれば、最近の国内外の大規模スタジアムの建設費用は概観すると観客1席当たり約100万円を上限としており、8万人収容としても1000億円もあれば十分のはず。ところが“規模縮小”して下村博文文部科学相が公表した予算でも1692億円で、1席当たり約170万円以上になってしまう。

その理由は、陸上競技と球技と音楽興行という技術的に共存が難しい三つの機能を全て盛り込もうとしているところにある。すでに開閉式屋根が予定されているのは知られているが、それは“全天候型”を必要とする音楽興行と、日当たりと通風が必要な球技場の天然芝のためである。さらに陸上競技の際には可動式観客席を設け“見やすくする”という。しかし世界的傾向としてはすでに、この様な多機能型から金のかからない単機能型へシフトしつつある。なぜ多目的施設にこだわるのか。ずばり「儲かるから」（と日本スポーツ振興センターの主張）だ。と言ってもこれは公共事業なので、莫大な建設費用は税金でまかなわれ、原価償却する考えが入っておらず、「年間4億円程度黒字」などと、お気楽なことを言っている。オリンピック後はどうするつもりなのか。さらに増える国の借金は？ 福島のことはどうなる？ 聖書は言う。

「蛭（ひる）にはふたりの娘がいて、『くれろ、くれろ。』と言う。飽くことを知らないものが、三つある。いや、四つあって、『もう十分だ。』と言わない。よみと、不妊の胎、水に飽くことを知らない地と、『もう十分だ。』と言わない火。」箴言 30章 15-16節

と。これは典型的ヘブル文学的修辞法として知られる一文である。聖書において「3」は完全数であるが、それにさらにもう一つ加えるということで、主題の重要性をさらに強調している。足るを知らない人間の欲に対し、神が猛省を促しているのだが、かと言って安々と「ハイ、充分です」などと言えるわけがない。なぜなら創造主である神から離れてしまった人間は、キリストを信じ罪を悔い改め、彼を心に迎えない限り、いつまでも「何か足りない」と感じ続け、その結果いつまでも「十分」にはならないのだ。だから元本返済するのに423年

もかかる愚かな施設を造ろうとする。日本人が神を信じ、心の充足を得ることが出来るように、また今日も祈る。“十分じゃない”ということは、“感謝が出来ない”ということでもあるのだから。

2014-4-20

